

## 旧吉田茂邸の再建と公開

久保庭 萌

はじめに

晴れた日には南に相模湾、西に富士山を臨む。そんな絶景の場所に旧吉田茂邸は建っています。旧吉田茂邸といえは、戦後復興期に内閣総理大臣を務めた吉田茂の住まいです。平成二十一年（二〇〇九）に邸宅が火災で焼失し、一時は焼け残った庭園しか見ることができませんでしたが、このたび建物を再建し、平成二十九年四月より大磯町郷土資料館の別館として一般公開と相成りました。おかげさまで来館者数は当初の予定を大幅に上回り、オープンから半年で六万人を達成しています。

本稿では旧吉田茂邸の概略や再建の経緯、公開後の事業についてご紹介します。

### 旧吉田茂邸の来歴

旧吉田茂邸は、もとをたざると、吉田茂の養父・吉田健三が明治一七年（一八八四）に大磯西小磯切通（現在の吉田邸がある場所）に土地を購入し、別荘を建てたことに始まります。吉田健三は福井県出身の貿易商で、イギリスのジャーデイン・マセソン商会横浜支店の支店長を務めたのち、独立して醤油醸造業や横浜・湘南の土地開発など多角的な事業を展開し、巨万の富を築きました。健三が大磯に土地を購入した時期はちょうど大磯が別荘地として発展を遂げようとしていた時期にあたります。明治一八年軍医・松本順により大磯に海水浴場が開設され、二年後の明治二〇年には東海道線が開通し、大磯駅が開かれました。そうした時期に、健三は大磯のなかでも特に眺望のよい土地を



再建された旧吉田茂邸

選り別荘を建てました。吉田邸はちょうど大磯丘陵の端に位置する小高い丘の上で、駅から少し離れた閑静な場所にあります。日頃の喧騒から遠ざかり、静かに時を過ごすには絶好のロケーションだったのではないのでしょうか。

明治二二年健三が四〇歳の若さで没したとき、吉田茂は一一歳でした。健三亡きあと吉田家を継いだ吉田茂は、外交官時代に健三から引き継いだ莫大な財産を使い果たしたといわれています。しかし、それでも大磯の邸宅を手放すことはありませんでした。吉田茂は昭和二〇年（一九四五）に大磯の邸宅を本宅として以降、昭和四二年に大磯の自宅で最期を迎えるまでの約二〇数年を大磯で過ごしました。

### 建物の変遷

焼失前の旧吉田茂邸は、吉田茂が生前頻繁に増改築を繰り返したために、非常に複雑な構造となっていました。建物は主に大正一四年（一九二五）に建てられた「旧館」、昭和一〇年代の「ベランダ棟」、そして昭和二二年頃の「応

接間棟」と昭和三〇年代に建てられた「新館」からなっていました。それより前、明治二〇年頃吉田健三によって建てられた別荘は、大正一二年の関東大震災によって倒壊しました。このため、旧館が建てられることになったのです。

吉田茂が大磯の邸宅を本宅としたのは、昭和二〇年のことです。これは、戦争が契機となっています。太平洋戦争末期の昭和一九年、東京で空襲が始まったころより、吉田茂は月の半分を大磯で暮らし、疎開していました。そして、当時吉田茂の本宅だった永田町の家が空襲によって焼失したのちは、大磯に生活の拠点を移しました。

こうして本宅を大磯とした吉田茂は、戦後外務大臣・総理大臣を務めるあいだにも足しげく大磯に通い、邸宅の増改築をすすめました。昭和二〇年代、吉田茂が総理大臣時代に建てられた応接間棟（一階の応接間「楓の間」と二階の書斎）は、大林組の建築家・木村得三郎の設計です。木村は大阪の松竹座や京都の弥栄会館などの設計を手掛けた劇場建築の大手です。応接間棟は全体が数寄屋造りとなっ

ていますが、一階の応接間は板張りの床で大理石の暖炉を配するなど和と洋とが融合した造りとなっています。これは、戦前に外交官として世界各国をめぐった吉田茂にふさわしい設えであったといえるでしょう。また、二階の書斎は畳張りの和室で、浴室も総檜造り。しかし、細部をみるとシャワーヘッドが欧風であったり、浴槽が舟の形をしていたりと細部に吉田のこだわりがみられます。この応接間棟は、吉田茂の総理大臣時代、白洲次郎や池田勇人、佐藤栄作といった吉田茂の側近たちが集まり、日本の政治を動かす舞台となりました。また吉田茂の死後、昭和五四年にはこの部屋で大平正芳首相とカーター大統領が日米首脳会谈を開いており、外交の場ともなりました。

吉田茂は政界引退後も精力的に活動を続け、大磯の自宅を海外からの要人を迎える迎賓館とする構想を考えます。それを具体化したのが昭和三〇年代の新館増築でした。近代数寄屋建築という建築様式を確立した建築家・吉田五十いそ八やを迎え、吉田茂は自宅の増改築を積極的にすすめていき

ます。完成した建物は、迎賓館にふさわしい豪奢で洗練された造りでした。二階の応接間として造られた「金の間」は眺望もよく、高い天井と大判ガラスを使用した窓が解放感を生み出しています。また、一階の食堂は当時ヨーロッパで一世を風靡していたアール・デコの様式をとり入れ、幾何学的なデザインがモダンな雰囲気醸し出しています。これらの部屋は、吉田茂が引退後に、大磯を訪れた国内外の要人をもてなす場として使われました。

### 建物の焼失と再建事業

吉田茂没後の昭和四四年、大磯の邸宅は民間企業に売却されました。その後、平成一七年に所有者から公的機関への売却要望が出てきたことを受け、神奈川県と大磯町が邸宅の整備活用に向けて動き出します。平成一八年には、神奈川県が旧吉田茂邸を隣接する県立大磯城山公園の一部として整備することを決めました。こうしたなか、旧吉田茂邸は平成二一年三月に火災で焼失してしまったのです。大

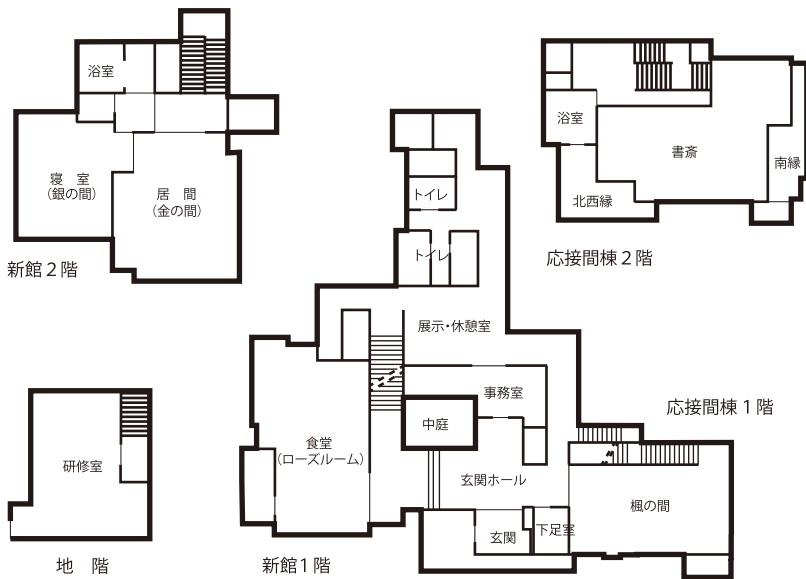


旧吉田茂邸内観 食堂（平成29年撮影）

磯町は焼失からすぐに、邸宅を再建するための募金活動を始めました。寄付金は町内のみならず全国からも集まり、さらに財団法人吉田茂国際基金が解散するにあたって二億八千万円を町に寄付してくださったことにより、再建の道が開かれました。平成二四年には県と町が「旧吉田茂邸再建事業に係る基本協定」を締結し、再建が具体化しました。そして、平成二七年に再建工事が始まり、平成二八年に建物が完成。翌年公開を迎えました。

今回主として再建したのは、昭和二〇年代から三〇年代に建てられた応接間棟と新館です。今回復元しなかった旧館・ペランダ棟については、家屋の礎石を元の場所に配置し、礎石広場として、もとの建物の位置や広さがわかるようになっていきます。

神奈川県は焼失前に建物の現況調査を行い、建物図面を作成していました。再建にあたってはそれらの調査結果を基に建設工事をすすめました。もちろん再建を前提として建物を調査したわけではなかったため、なかには細部の状



再建された旧吉田茂邸の見取り図

態が不明な部分もありました。しかし、残された図面と写真から、建築素材の選定作業を行い、さらに工事中に当時の写真を現場に張り出して確認作業を行うなど、当時の建物の様子をできる限り忠実に再現することに努めました。

## 旧吉田茂邸の公開

平成二九年四月より旧吉田茂邸は一般公開を開始しました。県立大磯城山公園としてすでに先行して公開していた庭園部分はもちろんのこと、大磯町が運営する旧吉田茂邸の建物内部もご覧いただけるようになっていきます。建物内部には、吉田茂が生活していた空間を再現するため、一部調度品を再現し、展示しています。調度品については、今後も随時増やしていく予定です。このほか、邸内の展示室では吉田茂にまつわる資料を展示しており、吉田の事績や当時の生活の一部を垣間見ることができるようになっています。また、邸内を利用したイベントや講座、研修も開催しており、様々な層に旧吉田茂邸を利用していただけるよ

う、積極的に事業を展開しています。

## おわりに

実は、旧吉田茂邸のオープンと前後して、吉田茂関連資料の寄贈が相次ぎました。また、吉田茂にまつわるエピソードも利用者の方から多く寄せられるようになっていきます。吉田茂の名前を冠した施設ができることで、こうした情報や資料が集まるのはうれしい限りです。

旧吉田茂邸は博物館施設として、邸宅の公開のみならず、吉田茂に関する資料の収集・整理・公開をすすめていき、地域や利用者の方に還元していきたいと考えています。まだまだ公開したばかりで、道半ばといったところですが、さらなる発展を遂げるべく積極的に活動を行っています。今後の展開にぜひご注目ください。